

ハブかれる

停学期間を終えて A と B が戻ってきました。最初、私は「停学期間、お疲れ！課題めっちゃ大変なのがメールから伝わってきたわぁ」といつもの調子で話しかけました。C, D, E も加わり、A と B はこれまで溜まっていたことを話し始め、「課題で 1 日 12 時間、30 日間勉強したのは人生初でもうやりたくねえ」「タバコを吸う量がめっちゃ増えた」など停学期間に起きたことを話していました。このときの雰囲気は、最初の仲良しグループができたときと同じような感じです。みんなが過ごしやすい仲良しグループに戻ったのだと私は思っていました。

それから数日経って登校してきた A の腕に根性焼きの痕がありました。私は何も気にしないようにしていたのですが、A ははじめの一つだと言って腕を見せつけてきます。かさぶたになっている根性焼きの痕。A と席の近い私にかさぶたをとって血が出てくるところを見せてきます。「A、それやばいよ。やめなよ」と言うとき驚いている私を見て笑いながらかさぶたをすべてとって血だらけになったのです。もちろんすぐに保健室に行き手当てをして教室に戻ってきました。この繰り返しが 2 週間くらい続きました。

そんななか A と B、そして私の 3 人でいるときに「最近、C の態度が気に食わないんだよな。あいつ 1 週間ハブしない？」と A が言い出しました。「ハブ」とはグループから省くことの略です。それに対して私と B はそうすることに抵抗なしとして次の日から C をハブき始めます。具体的には、私と B が D と E に「1 週間くらい C をハブするからあいつと関わるな」と伝えて話しかけてきてもトイレに行ったり、近づいてきたら離れさせたりします。また、同じクラスの生徒たちにも今週から C をハブくからできるだけ無視するように伝えるのです。もうこのときは、A は私のいるクラスで絶対的な存在感を出していました。C が自分はハブになっていると気づいてからは、C は誰にも話しかけることはありません。

1週間後になるとCをそろそろ許してもいいだろうとAが言い出します。そして、次に言うのです。「最近、Dが気に食わないんだよな。1週間ハブろうぜ」。Dをハブいた次の週はEが1週間ハブかれました。これで終わりと思ったところで私の番がきます。きっとこう言ったのだらうなということが想像できます。

「最近、原は俺たちと一緒にいないで一人で別行動してるし、遊びに誘っても来ない。だったらハブこうぜ」

当然、私はその場にはいなかったのですがどう言ったのかは推測の域をでることはできません。当時はグループ以外にも他のクラスメイトや彼女と過ごす時間も大切にしていたのでハブきやすかったのかもしれませんが。私はまず、クラスの誰とも話すことができなくなりました。Aに逆って私をハブかなかつたらその生徒自身が危うい立場に置かれるようになります。1日誰とも話せない第1日目スタートになります。2日目になると当時あった高校の無料掲示板サイトに私に対する誹謗・中傷が匿名で書かれます。

「原、あいつキレやすいよ。マジ近よんないほうがいい」

「今日も原が学校にきてるぞ。マジきもい。関わんな」

たった2つでしたがハブかれ、クラスでは皆に無視されるのが約2週間続いて精神的に限界でした。なので、私はAに謝りました。

「俺、Aをはじめグループの皆に何か悪いことしたと思う。本当にごめんなさい」

このことを伝えた次の日からは何もなかったようにグループメンバーとクラスメイトとも話しをすることができるようになりました。いじめの加害者にも被害者にもなった。「加害者になって友達を傷つけてしまったこと、本当にごめんなさい」という気持ちは、忘れないです。さまざまな経験をして今でも思うことは、当時は精神的にとてもしんどかったことです。学校でいじめにあうだけでも大きな精神的負担になりますが、家庭にも問題がありまし

た。私の父親は厳格な性格でアルコールが入ると怒りやすくなるのです。それは私が幼少期からずっと続いており、父親が仕事から帰ってくるときようだいは自室に行きます。大きな物音やテレビ音が聞こえると、私は母親とのケンカが始まったと思えばくっとして本当に心から休む場所がなかったのです。よく安心できる居場所の必要性が問われますが、高校1年生のときの私には、家も学校も心から安心できる居場所ではありませんでした。

このような状況の中でグループに新たなルールができます。それは、「Aが遊びに誘ったときに部活以外の理由がない場合には絶対に遊びに参加しなければならない」ということです。これを破るとまたハブかれます。なので、グループメンバーはできるだけ守ろうとします。例えば、「土曜日に公園で酒飲んでオールするから〇〇駅集合」です。これを断る理由が難しいのです。オールをするということは、何か用事があっても待ち合わせの駅まで終電で行くことができれば途中から参加できるため断る理由が体調不良以外で見つからないのです。オールのたびに体調不良と伝えるとそれは嘘だということが自然とわかりますし、終電がなくなるまで部活をやることは当然ありません。なので、オール+酒のワンカップ一気飲みは慣例となっていました。他にも、カラオケに行く日に私は急性胃腸炎になりました。行けない理由を言っても遊ぶことをサボろうとしていると思われひどい下痢の状態が無理して行ったことやDに「今から海水浴に行くから来い。〇〇駅で待ってるから。来ないならわかってるよな？」と言って急に誘い出し、約2時間待ってから海水浴場に行ったりと束縛がひどかったです。私はいじめにあうことは避けたいと思い、とりあえずとことん付き合っていました。

これまでに述べてきたような生活を高校1年の10月まで送っていたのですが、心が本当に悲鳴をあげていることには気づいてはいませんでした。

つづく